



発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

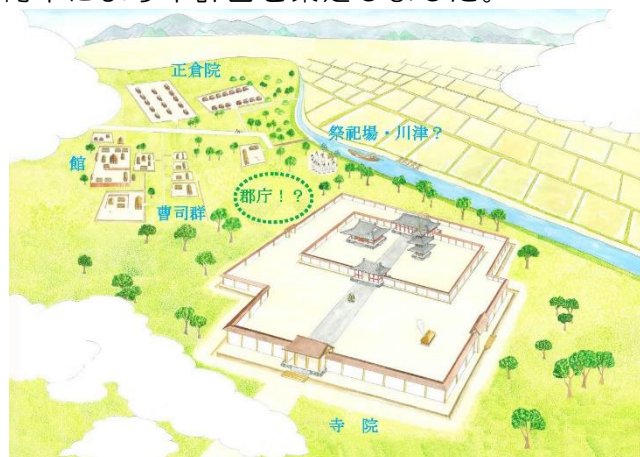
国指定史跡「幡羅官衙遺跡群」保存活用計画について

平成30年2月に国指定史跡となった幡羅官衙遺跡群について、史跡を確実に保存し、継承していくために、史跡の要素をまとめ、本質的な価値を明らかにし、適切な保存・活用・整備についての方針等を提示するため、令和元・2年度に本市及び深谷市両市により本計画を策定しました。

本計画では、保存について、史跡及び周辺地区を3地区に区分し、それぞれの地区に適した方針及び方法により行っていきます。

活用については、史跡を学び、歴史・文化を理解し、親しむ場として活用し、その価値や魅力を発し、歴史遺産としての活用とともに、地域住民の参画なども推進していく予定です。

整備については、恒久的な保存を前提とした整備のほか、史跡の空間を体感できる整備、周辺遺跡などとの連携、学び、親しみを育てる整備を行っていく予定です。両市は、今後この計画に則って、全国に誇れる地域の宝である本史跡を守り、活かし、継承していくことに取り組んでいきます。(腰塚)



幡羅官衙遺跡群復元イメージ (熊谷市作成)

講演会「妻沼聖天山と渋沢栄一」

4月18日、妻沼聖天山の春季例大祭に合わせて講演会「妻沼聖天山と渋沢栄一」が開催されました。妻沼聖天山歓喜院石舞台において、鈴木英全院長主による辻説法に引き続き、「妻沼聖天山と渋沢栄一―妻沼地域と渋沢家の関わり―」を講演しました。渋沢栄一が妻沼聖天山を訪れ、昼食をとったことや、父と密会したことなどを記した記録について紹介し、血洗島と妻沼での藍玉製造や養蚕を通じた地域的なつながりについて解説しました。

新型コロナウイルス感染予防対策の上、約200人と多数の参加があり、NHK大河ドラマ「青天を衝け」を機に話題を集めている渋沢栄一とその周辺について興味関心を共有しました。(山川愛)



講演会「根岸家と渋沢栄一の周辺」

5月7日、大里コミュニティセンターで、講演会「根岸家と渋沢栄一の周辺」が開催されました。江戸時代末期から明治時代に掛けて活躍した根岸友山・武香と渋沢栄一との関わりをテーマに、友山の妹の子である清水卯三郎や、熊谷宿本陣の竹井澹如との交流などについて紹介しました。特に武香は地域振興に務めた人物で、熊谷銀行(後の埼玉銀行)の創設に関わったほか、若き学生の育英事業を進めた埼玉学生誘掖会によって地域教育の振興を図るなど、渋沢との協力関係が後世に大きな影響を与えました。

今回の講演会は根岸友山・武香顕彰会の解散に伴い、新たに発足した根岸友山・武香研究会の啓発事業として企画されました。講演会には40人の参加があり、渋沢に対する関心の高さを再認識しました。(山下)



市内遺跡発掘情報

上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査について

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今回は、令和3年1月から3月まで実施した前中西遺跡の調査について紹介します。

今回の調査地点は、遺跡範囲北西部に位置します。調査面積は370㎡と広くありませんが、調査を実施した結果、弥生時代や古墳時代の竪穴住居跡、溝跡、土坑などが多数見つかりました。このうち、調査区北端で見つかった弥生時代中期後半の竪穴住居跡は、長軸約10mを測る大型のものであり、床面を2～3回貼り替えており、リフォームをしていたことが確認されました。この住居跡は、その大きさから「前中西ムラ」の長の住居であったことが考えられます。(松田)



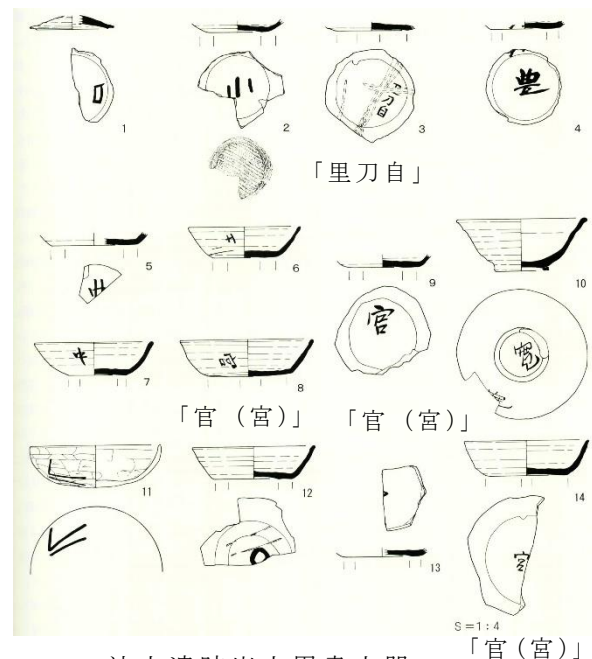
弥生時代の大型竪穴住居跡

池上遺跡・鶴巻遺跡の調査報告について

平成30年度及び令和元年度に発掘調査を実施した池上遺跡・鶴巻遺跡について、調査報告書を刊行しました(熊谷デジタルミュージアムに掲載予定)。これらの遺跡は市内東部の池上地内に位置し、縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡です。

今回の調査では、池上遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が2基検出され、これは東日本でも最古級段階のものと推定されます。また、この遺跡を横断する河川跡からは、墨書土器(「里刀白」、「官」、「宮」など)が出土し、特に「里刀白」は、律令制が本地域に及んでいた根拠の一つと考えられる貴重な発見です。

鶴巻遺跡では、沼跡の一部から飾り弓、槽などの木製品、多量の桃核が検出され、水辺の祭祀が行われた可能性があります。なお、池上遺跡では、道の駅整備事業に伴い、令和5年度まで、発掘調査を実施する予定ですので、今後の成果にご期待ください。(腰塚)



池上遺跡出土墨書土器

連載 くまがやの古墳群

② 甲山古墳群 — 県下第2位の規模を持つ円墳を擁する古墳群 —

甲山古墳群は、大里地区、荒川右岸の江南台地東端に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。古墳が立地する台地は、標高55m前後を測り、すぐ北東には荒川右岸の低地を臨みます。

本古墳群は、大型円墳である甲山古墳を主墳にして、以前は数基の小円墳で構成されていましたが、現在甲山古墳以外は消滅しています。

甲山古墳は、直径90m、高さ11.25mの2段築成の円墳で、その規模は、円墳では行田市埼玉古墳群の丸墓山古墳に次いで県内第2位の規模を誇るものです。墳頂には冑山神社本殿(市指定有形文化財・建造物)が鎮座し、削平は受けているものの、



そのお陰で墳丘が護られ比較的良好な遺存状態で今に伝えられています。また、墳丘東側には方形の張出部が存在し、古墳祭祀が行われる造出部の可能性が示唆されています。本墳からは、採取及び北側のトレンチ調査により円筒埴輪片が出土しており、その特徴から6世紀後半の築造と推定されています。なお、本墳は1989年に県指定史跡となっています。(吉野)

写真：墳頂に冑山神社本殿が鎮座する埼玉県指定史跡・甲山古墳(東から臨む)

◇源宗寺本堂保存修理事業の進捗



令和2年12月、仏像の仮小屋への搬入が完了し、翌年1月に本堂は解体され、約360年という本堂の永い歴史に幕を下ろしました。その後2月に地鎮式（左写真）が行われ、新本堂の着工に向けて、工事の安全を祈願しました。建築確認申請のためしばらくの間、未着手でしたが、4月末に認可が下り、ようやく基礎工事が始まりました。

一方、仏像の修復については、当初は必要最低限の修復を見込んでいましたが、移動やその後の調査の結果、像の全面的な修復を行う必要性が出てきました。これまで、本堂建て替えのため、委員会で寄付を募って参りましたが、今後は護持会で新たに仏像修復のための寄附金を募集する予定です。皆様の御協力をお願いします（山川愛）

◇愛染堂・藍染絵馬の一般公開・講演会

2月21日、NHK大河ドラマ「青天を衝け」の公開を記念して、熊谷市下川上の「宝乗院愛染堂」を公開し、同院で保管する市指定有形民俗文化財「藍染絵馬」（4枚）、渋沢栄一の師で義兄である尾高惇忠が揮毫した同文化財「奉納額」を特別公開しました（右写真）。これは、日本近代経済の父・渋沢栄一に関連した様々な情報発信に合わせて企画されたもので、愛染堂の本尊である「愛染明王」は藍玉の産業における祈願と深く関わることから、尾高・渋沢家の信仰を集めたといわれています。

また、尾高・渋沢と愛染堂との関わりについて再認識する機会の提供を目的に、併せて解説会を実施し、「愛染堂と藍玉産業―尾高惇忠筆の奉納額と渋沢家の関わり―」というテーマで藍玉産業と信仰について講演しました。当日は厄病退散祈願もあり、約150名が参加しました。（山下）



◇星溪園・石上寺フィールドワーク講座



2月上旬、アルスコンピュータ専門学校での学習の一環として、熊谷市名勝「星溪園」の周辺をめぐるフィールドワーク講座を2回開催しました。同専門学校は星溪園と同じ鎌倉町に所在し、日本文化を学ぶ機会として特別講義が毎年開催されています。星溪園の庭園について学ぶほか、南に位置する石上寺本堂内の見学も実施しました。講座では、明治時代初頭に完成した当時の「池亭」が現在の星溪園になるまでの経緯などについてお話ししました。また、石上寺にはエドワード・シルヴェスター・モースの銅像があり（左写真、右端）、明治時代に当寺で行われたモースによる進化論の講義についても紹介しました。（山下）

【文化財探訪 うんばつか 運派塚】

市内三ヶ尻にある幸安寺は、梅や桜、牡丹やあじさいなどの四季折々の花々が境内に植えられ、花の寺としても知られています。この幸安寺を開基し、建立したとされるのが小此木紀伊守の小笠原運派です。幸安寺から200メートルほど離れた三ヶ尻小学校の南側に小笠原運派の墓「運派塚」（古墳時代後期の前方後円墳、左写真）があります。幕末の画家、洋学者として知られる渡辺華山は、三河国（現在の愛知県）田原藩の家老でもあり、天保2（1831）年、調査のため田原藩の旧領地であった三ヶ尻を訪れ、その時の記録を「訪風録（ほうふうろく）（へい）ろく」にまとめています。その「訪風録」（右写真）には、華山や幸安寺住職らが運派塚を訪れる様子が描かれています。（山川愛）



文化財コラム 西原遺跡の住居跡から

人と火の関わりは人の進化と進歩の基礎と言えます。遺跡や出土品などの考古資料にはその過程を知る資料が豊富です。先人達は、燃料の発見と保存を考え、発火させ、持続させ、熱と光に転化し利用してきました。それらの工夫された技術の集積の上に私たちはあります。火と日は近似しています。太陽は明るく熱く燃え闇を払います。暗夜でなくとも囲炉裏火に心安らぐ人は多いものです。数十万年にわたる無意識の記憶が根底にあります。

熊谷市域でも発掘された縄文時代の多くの住居跡床中央には、炉が設えてあります。西原遺跡(千代地区)は今から3,500年以前に造られた集落跡で、59軒の竪穴住居跡が発見され、おびただしい遺物も出土しており、当地方でも拠点となるような村だったと考えられています。第2号住居跡(写真)は直径約3mの円形で、土間には扁平な石を敷き、炉は河原石で囲みますが、他の住居跡の炉では土器も埋め込んでいました。縄文人は防火と熾きの保存も意図していたようで、炉が住まいの中核施設であることが判ります。当初この住居は床全面に平石が敷かれており特別な役割があったようで、石敷は防火類焼を防ぐためとも思われ、その役割の一つが集落の火を管理するための「火守り施設」ではないかと推定されます。想像すると、西原遺跡の時代から現代に進歩しましたが、火の制御を誤れば人は火に滅ぼされるかも知れません。これは智慧の実を喰らった人の宿命なのでしょうか。(新井)



マニアックな文化財メモ

片倉シルク記念館―「青天を衝け」に関連して

2月18日、熊谷市本石の片倉シルク記念館で、熊谷シルクの歴史と片倉シルク記念館について学ぶ講座を開講し、15名が参加しました。この講座は、概要報告書『旧片倉工業熊谷工場・片倉シルク記念館：埼玉県熊谷地域における絹産業と製糸の歴史に関連した近代的建造物の概要をめぐって』(熊谷市文化遺産研究会)の刊行を記念して開催されました。NHK大河ドラマ「青天を衝け」の放映が始まり、渋沢栄一や富岡製糸場初代場長の尾高惇忠に関心が集まる中、片倉工業の創設に関わった渋沢の存在と、富岡から熊谷の歴史的経過を絹産業に関連したエリアとして認定し発信を進める「上武絹の道」プロジェクトに想いを馳せる講座となりました。「片倉工業の歴史と尾高・渋沢の関わり」をテーマにした講座の後には、片倉シルク記念館の館内見学も行いました。(山川愛)



編集後記

コロナ禍の収束がいまだ見えない現状にあり、今回も前号に引き続き、ウィズコロナとしての本市の文化財保護業務について紹介することになりました。そのような中で、NHK大河ドラマ「青天を衝け」に端を発した、渋沢栄一とその周辺に関する関心の高まりは、一つの光明のように感じられます。渋沢と関連した熊谷地域の先覚者や郷土の歴史を再認識する機会となり、多くの話題を集めています。妻沼聖天山での足跡や現在の星溪園で竹井澹如と昼食を楽しむなどの記録が残され、とても興味深い歴史ロマンを感じることができます。今後も、資料調査を進めながら、情報発信を続けていきたいと思ひます。(山下)



発行：令和3年5月20日(2021/05/20)

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中